

Presented by *STAR DUST BOOKS*



創星 第四卷



Take free

目次

- | | | |
|----|-----------------------------|-------------|
| 3 | 短歌10首 風と海岸線 | 鳩山豆子 |
| 6 | いのり | 一路真実 |
| 8 | キスをするべきだよ | ナナセヒユキ |
| 10 | 白 | 詠人不知 |
| 13 | クラシック音楽、教養のお時間 | 天沼太郎 |
| 16 | サブカル対談 | 鳩山豆子×一路真実 |
| 23 | イヌとペンギン | いちろまみ |
| 28 | 妄想百景 | マチコ・マン・ネンドコ |
| 31 | About movie | 鳩山豆子 |
| 32 | K区役所愛情創出室 | 一路真実 |
| 42 | Philosophy of Stardustbooks | |
| 43 | 編集後記 | |

怪獣のお腹の中で眠る夜
思い出せるよ全ての光

新しい街はわたしに優しくくて
どちらにしても戻れない夏



こうやって海の匂いを嗅ぎながら忘れやがったキャベツの心

街中のかばんを抱いて眠る夜よろこびじゃないかなしみじゃない

体ごと下に垂らして待っている 見られないなら笑える夕日

引越した理由と言えば引越さない理由がひとつもなかったことだ

砂浜に寝転んでいる 会いたいと思えば会える人との別れ

そこだけがいつも光って見えるのは知らない街の郵便ポスト

やわらかい炎のように微笑んでたったひとつの僕らの船出



A black and white photograph of a beach scene. In the foreground, the sand is textured with gentle waves washing onto the shore. In the background, a tall, multi-story building with many windows stands on a slight rise. The sky is overcast and grey.

忘れ物だらう
海岸線に打ち上げられた世界中の風という
風



一路 真実

下痢をした。腹痛が残るのでひとまずトイレで待機しながら、することもなく腕を上げたり肩を回したりしていた時に、ふと思い出した。幼稚園に通う前に、毎朝必ずトイレでお祈りしていたなあ、と。小さい頃は、なぜか世界がとてつもなく恐ろしい場所のように感じていた。自分の知らない間に、大きな力が働いているような気がした。自分以外の人間はみんなダミーなのではないかと疑うこともあったし、家族が突然消えてしまうのではないかと思っていた。そういうわけで毎朝必ず、「トイレの神様、幼稚園に行ってる間に、不幸なことが起きませんように」と祈りを捧げていたのである。(なぜトイレだったのだろうか。子どもたちは「トイレの花子さん」などと言って怖がるが、なぜ用を足すだけのトイレにそうした霊的な意味付けを自然と行うのだろうか。)

思えば、不思議な子どもだった。特に幼稚園の頃は、自分が魔法を使えると思っていた。どこからもらったのか薄汚れたポーチを持ち歩き、「これは時間を止める道具だ。普通の人には分からないようにこんな姿をしている」と言ったり、突然目を細め、「何か白い泡のようなものが見える。これを見えたものしか魔法は使えない」と言ったりする。実際のところ、時を止めることなどできなかつたにも関わらず、私のあらゆる種類の戯言

を真剣に聞いて、「本当だね」「すごいね」と言ってくれた一人の友人がいたからこそ、私のこうした魔法使い発言も変にこじらせることはなかったのだと思う。

私にとって、幼稚園の時の友人はその子だけだった。小学生になり、友人が増えてきた頃、彼女は引越してしまった。その後、一度だけ手紙のやり取りをしたことがある。彼女がくれたシンプルな便箋に書かれてあったのは、髪の毛の方と彼女の作り方の話で、ヤンキー風に変わってしまった彼女のプリクラが貼られていた。私は、大切に机に閉まっていた、動物の形をした小さな消しゴムをいくつか同封して返信したが、それ以来彼女から手紙が来ることはなかった。

結局、彼女は中学生の時に私のいる学校に再び転校してきた。彼女はすぐにヤンキーの先輩と付き合い始め、まともな会話もないまま自然と違うグループに属すようになった。高校生になったある日、偶然学校帰りに街で再会した時も、やはり隣には男を連れていた。進学校に通っていた私を見て、

「私にもK高に通う友達がいるんだから」

彼女は笑いながら男に向かってそう言った。そして、私に向かって問いかけた。

「うちら、昔は仲良かったよね？」

その発言は、間違っていないかった。二人が毎日遊んでいたのなんて、やはり小学校低学年の頃までだ。でも、実際私に現実を突きつけたのは、この発言だった。それまで、分かっていたはずなのに、心のどこかでまだ二人の関係を特別視していたのだ。この時にやっと、私は魔法使いではないと言われたのかもしれない。

それから、十年近く経ち、再び地元を訪れた私とばったり再

会したのは、彼女の母親だった。

彼女の母親はとてもきれいな人だった。色が白く、ほっそりとした体形で、目鼻立ちのはっきりした顔をしていた。思い出すことと言えば、小学校の帰りに、彼女の家に遊びに行った時のことだ。彼女は玄関のドアを開ける前に、私にこう言った。

「うちのお母さんはちよつと思議なことをするけど、別にじつとしてれば大丈夫だから」

部屋に入ると、すぐに彼女の母親の前で正座させられた。電気を点けない薄暗い部屋は、窓から差し込むわずかな明かりだけで照らされていた。彼女の母親は窓に背を向けて座っており、暗くて顔がよく見えない。彼女の母親は、私の額あたりに手をかざしてきた。私は目をつぶったが、あまりに静かになったので、薄眼を開けてそつと覗き見た。掌がこちらを圧迫するように、目の前にある。それは儀式だった。その後も、彼女の家にいくと必ず、母親が額に手をかざして祈りを捧げてくれた。

再会した彼女の母親は、昔のきれいな面影など全くなくなっていた。あの真っ白だった肌は陽に焼けてしまい、細かった体も異様なほどに太っている。挨拶した私のことを無言でじつと見つめてきた。

「瞳が動かない場合は、精神的な病気の可能性が高い」

その言葉が脳裏をよぎった。

彼女の母親は、あの手をかざす宗教にのめり込み過ぎ、旦那と折合いがつかず離婚した。それに伴い、昔いた町に戻ることにになり、彼女も私の中学校へと転校してきたのだった。程なくして、彼女の父親が亡くなり、離れて暮らしていた弟も母親の元へ引き取られたと聞いた。

あれから十年。出会ってすぐに彼女の母親は言った。

「あの子は、死んだよ」

誰からもそんな話を聞いていなかった私は、一瞬間のおかしくなった母親が嘘をついているのだと錯覚した。その後、同窓会などで彼女の行方を聞いて回ったが、真偽が確かめられなかった。彼女は本当にいなくなってしまったのか。

そして、最近のことだ。私の母から電話があり、彼女の母親が亡くなったと聞かされた。自転車で道路を横断中に車にはねられ、頭を強く打った。新聞に載っていたのだという。もう残っているのは彼女の弟だけが、彼の行方を知る者もない。

私の人生という線路の上に、彼女は出たり入ったりしていたが、結局は別々の線路を行くことになったのだと思っていた。しかし、私の知らないうちに、彼女の線路は消えていた。人と出会い、別れていくことはそういうことなのだろうか。もし、自分の出会った全ての人の消息がつかめるのなら、世界はとも狭く息苦しいものになったかもしれない。私の線路から人がほとんど消えていく。だからこそ、世界は成り立っていて、私も静かに暮らしていられるのかもしれない。

しかし、彼女は本当にいなくなったのだろうか。今でもよく、狭いアパートと薄暗い部屋の明かりの中で、彼女の母親から一緒に手をかざされたことを思い出す。あの手は私だけしか守れなかったのだろうか疑問に思う。



(終)

キスをするべきだよ ナナセヒユキ

キスをするべきだよ

君が僕のことを好きなのかもしれないと感じているのなら、
君は僕にキスをするべきだよ
君が僕の手をふいに離そうとするものだから、
僕はもっと君のことを好きになるよ

「ねえねえ」「何?」「なんでもない」「なんだよ」「内緒」「ふうん」

僕らはこうして小さな世界を、僕らだけの小さな世界を
大切にそっと握りしめてきたんだ
時に涙色に滲む外の景色に
それでも僕らは二人でキスをするべきだよ

君が僕のことを今以上に好きになりたいと願うのなら、
君は僕にキスをするべきだよ
君が僕の髪をやさしくとかす度に
僕はもっと君のことを好きになるよ

「ねえねえ」「何?」「赤と青どっち」「青かな」「私は赤」「そっか」

僕らはこうして小さな世界に、僕らだけの小さな世界に
ささやかな色を塗り続けてきたんだ
時に煙色に霞む季節の流れに
それでも僕らは二人でキスをするべきだよ

君が僕のことを好きだと信じて疑わないのなら、
君は僕にキスをするべきだよ
君が僕のほっぺたにおでこをくっつける朝は
僕はもっと君のことを好きになるよ

「ねえねえ」「何?」「手をつなごう」「うん」「心もつなごう」「うん」

僕らはこうして小さな世界に、僕らだけの小さな世界に
終わりのない物語を紡ごうと試みたんだ
時に埃色に濁る音楽の響きに
それでも僕らは二人でキスをするべきだよ

君が僕にさよならをするような時が仮に来ても、
君は僕にキスをするべきだよ
君が泣いた後の真っ赤な目で僕を見つめるあいだ
僕はもっと君のことを好きになるよ

「ねえねえ」「何?」「ありがとう」「ん?」「ありがとう」「こちらこそ」

僕らはこうして小さな世界を、僕らだけの小さな世界を
明日も明後日も愛おしく思うことを誓ったんだ
時に錆色に沈む言葉の重さに
それでも僕らは二人でキスをするべきだよ

『僕』のことを好きな『君』のことを『僕』は好きだよ
『君』のことを好きな『僕』のことを『君』は好き?
『君』のことを好きな『僕』のことを『僕』は好きだよ
『僕』のことを好きな『君』のことを『君』は好き?

僕らがこうして守ってきた小さな世界に、僕らだけの小さな世界に
僕らは二人でキスをするべきだよ
時に永遠色に染まる自由に
だからこそ僕らは二人でキスをするべきだよ

いつまでもどこまでも
僕らは二人でキスをするべきなんだよ

(ナナセヒユキ)

白

でも白なのか。白かいなか知らずして道はあるのだろうか。・・・いや、白々しくも白と言いつらねば。しからば・・・白権。

でででででででででででででででで。

閉幕 赤黄青 いや緑

左を陣取りますは赤。その右には黄。その右には青。いや、緑。点灯しているのだ。頭の中で。転倒しているのだ。あたかも生で。また、右に陣取りますは赤かもよ。はて、誰がだ。あたかもまさかも逆さもあるのです。

変わるがわる季節は廻る。巡り巡ってめくるアルバム。

歩かぬ訳にはいかぬ、儚く。

瞬く瞬く瞬く。

木々に聞き、危機迫り、街は今も雨が降る。きつと来る。くる、くると、またやってくる。

よみびとしらす
詠人不知

第二幕 紫桃 もういいオレレジ

お礼にお見舞いしよう。

使用中でもいいんだ。忘れないでくれ。暮れなずむ頃の窓辺を。唐突に突入しよう。性懲りもなく情報に汚染された憶測。

目録、桃の匂も遠のく。

轟く事も驚く事もなかった。

架かった橋を叩き壊せばオレンジ。

うん・・・、それでいいのだよ。

第三幕 色違いの位置

四季折々、その節は・・・。

長い沈黙、提灯横丁の打刻、絵画を要する。ぬぬ、おぬし、するめでいいのだな。抜け目なくするめを頂戴し、生涯を全うしようなどとは。

横道に反れた時、そこが王道と吐くしかなかったはずが、嗚呼、不条理情けなし、言い訳御無用01兄さん。

虹が滲む、静かに沈む、イズム、ハッと気付く、ホンのちよつぱり傷ついたくらいで大層な事ですな、旦那。

まあくしょうがない、まあく仕方ない、で、あつぱれあつぱれ、さあく笑え。

は、はは、ははははは。

葉、羽刃、破破破破派。

・・・ちっ・・・畜生が。

ユルユルと滑り落ちる白樺のすそのどけき花も散る乱。

備考欄には微香有りと、もしくは尾行有りと付け加えておいてくれ。

た・・・頼む。そう言い残し、奴は消えていったんだ。

一旦停止を無視し、不思議な感覚に苛まれ、豆粒のようになっていった。

八百屋第三番地高層ビル近く、色付く勝負服との擦れ違いも、さもや幻。

第四幕 キタカゼ

忍び寄る奇妙な残骸、我先にと飛び付くコントラスト、向かう所の脂身、ムササビにワビサビ。

異常な程の数、眠りにつくまでの策、むさ苦しい熱帯夜、交差点で愛したアタイと明日の為の素敵な家族計画。

気高くもけだるく、時の運試しに忙しなく、いつしか色を忘れていた困いを、憩いと呼ぶのならば、溢りたくるしかないのだと群青色を選択。

センターに立っていた影がニヤリとした時には、もう既に恐ろしい始まりの合図。

相槌が小槌になりますかね、かねがねお聞きしますが、金ですかね。

離れ小島で待っていたのは、瓜や貝に別れを告げた蟬時雨だった。

第五幕 クロニタ

蜜蜂、竹林、草履、爪楊枝、おはじき、煎餅、ベンチ、社会的見地、通信簿、コード、蠟燭、ストマック。

砂利、カスタネット、背骨、具象化、方式、地縛霊、パミューダ、螺旋、ピラミッド、クロニタ。

噂が噂を呼び、ネズミ算式に覆いかぶされば全てが下から上へと早変わり。

苦勞も水の泡、胡散臭い畏、曖昧が今、色濃く反映された月のカケラ、脳みその奥の奥でキリキリと鳴っては止まらぬ激烈なる性、まだ、性。

スタンガン、スタンバイ、アリバイのないララバイ。

閉幕 白

色白に色目仕掛けの吉祥寺。

意気消沈した生き字引、観阿弥世阿弥とアブラゼミ、ミンミン。

民族の一人を名乗り、気の毒に飛び降り、気の遠くに折々、もうゴリゴリは懲り懲りと嘆く事なかれ。

カレーとは紙一重、使われる気のないハサミ、ハラミでナムアミ、アナーキー、あらずしから君次第。

まだなのか。いや、もうなのか。馬なのか、牛なのか。

が、しかし、ガシガシ、ガチガチなレースじゃ、面白くない。

だから、せめて、まさか・・・。

で・・・？

クラシック音楽、教養のお時間

天沼 太郎

第一回

そうだったのだ、やっぱりこの人は本物だったのだ。拍手をする手は止まらなかった。演奏者はもう奥に引っ込んでいる。疲れ果て、おそらくは控え室のソファでしばらくは動けないだろうと分かっているのに。

昨年2010年10月23日、演奏会の時の話である。

◎ マウリツィオ・ポリーニ ピアノ・リサイタル

曲目 ベートーヴェン

: ピアノ・ソナタ第30番 ホ長調 op.109

: ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調 op.110

: ピアノ・ソナタ第32番 ハ短調 op.111

最初の印象は最悪だった。70歳前にしては何とも危なっかしい足取りで、その老人はステージに現れた。椅子に座るとすぐ、それこそ溜めもなく弾き出したベートーヴェンのなんとも乱暴で速いこと*1。快速なのではない、味わいもなく、流している感じなのだ。

あのどこか儚さ漂うベートーヴェン晩年のピアノ・ソナタ*2が、まるで列車の発車メロディーのように軽薄で、風情も何もない。ただ指の運動*3にしか聞こえない。

思えば、その高名なピアニスト、マウリツィオ・ポリーニの、日本における評価は大きく割れている。吉田秀和*4が絶賛する一方で、外面的に過ぎるとき下ろす評論家も少なくない。実際、彼の若い頃の同曲の録音は、確かに呼吸の浅い演奏で、私にはとても聴く気がしない。「完璧なピアニスト」*5がキャッチコピーだった彼の演奏は、私には造花のように生命感を欠き、そして深みのない演奏に思えた。

そんなわけで、私は長いことポリーニに興味を持たなかった。「彼より上手く・・・」というルービンシュタインの褒め言葉*6も、作り物っぽくて好きになれなかった。また、超一流だったせいか？福岡に演奏に来ることもなかったし*7、来たとしてもチケット代が高すぎて演奏会など夢のまた夢だっただろう。

あれれと思ったのは数年前のこと。NHK*8で放送された演奏会で、あの完璧と言われたポリー

ニが、ミスタッチを連発。しかしながら、なんとも熱い演奏をしていて、ついついテレビに見入ってしまった。

それはともかく、第30番*⁹は(私の耳が悪いのかもしれないけれど)、とても良い悪いのいえるレベルに達した演奏には思えない。一体これは何なのだ？ケチな話になるが、プログラムは3曲。普通のピアニストなら、CD1枚に収まる曲目である*¹⁰。こんなペースで適当にじゃんじゃん弾かれては、チケット代泥棒である。これではまるで、友人から「信頼できる人」と紹介された人物が、どこからどう見ても詐欺師だった、そんな感じである。

話戻ってその日の演奏会プログラムは、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ。32曲ある彼のピアノ・ソナタのうち、最後の3曲が演奏される。いずれもベートーヴェン晩年の作品で、寂しさや諦観に満ちあふれた渋さ満点の名曲である。ことに第32番後半楽章*12は素晴らしい。もし、ベートーヴェンが作曲した曲のうち、どれか一つを選べと言われたら、私は迷わずその楽章を選ぶ（ただし前半は、それほどいい曲とも思えない）。

何とも困った混乱の中で、演奏会は2曲目、第31番へ。これまた、渋い渋いはずの31番が、何とも元気爽快な曲に変わり果ててしまう。以前ヴァレリー・ゲルギエフ*13指揮の、マーラー*14の交響曲9番を聴いて同じ思いをしたことがある。「死」をテーマとする凄惨な曲なのだが、最後まで筋肉隆々の元気な演奏に呆れた。最後の3分(全部で約80分)、取ってつけたかのような「死」で演奏が終わった。今でもあれは、指揮者が指揮していた曲が何だったのか、思い出せなかったためだと思っている。

ところが、ゆっくりではあるが、今回の演奏では何かが起きていた。演奏家の調子が出てきたのかもしれない。あるいは単に、私の耳がその演奏に慣れ始めただけかもしれない。ともかく、演奏になにか力が入ってきた。演奏に、「元気」では表現できないような、「凄み」や「執念」を感じさせる「何か」が立ち現れてきた（ように、私の耳に聞こえ始めた）。それとともに、やっぱり勘違い演奏であって、それに感心し始めている私は間違っているのではないかと、アンビバレントな思いがしてくる。頭の中のクエスチョンマークはどんどん大きくなっていくばかり。今回、あのポリリーニを直に聴くことで、彼がどんなピアニストであるか、その結論を出すつもりでやって来ていた。それなので、少なからず凄い演奏家ではないかと期待していたポリリーニに、見切りをつけようにもつけられない宙ぶらりんな状態である。

曲は31番の最終楽章に入った*15。フーガ*16が美しい陶酔的な楽章である。ところがこのフーガも、美しいというより懸命に何かを紡いでいる感じで、私のイメージとはあまりに隔たっている。けれど、その必死な感じが「全力投球」みたいで、何となく聴けてしまう。それこそ、命がけで何かを追いかけている感じなのだ。気がつくやうに、体中汗をかいている。もしかして、何か凄いものを体験しているのではあるまいか、思い始めてきた。

つかの間の休憩の後、プログラム最後、ピアノ・ソナタ第32番が始まる。始まってすぐにハツとする。これまで意味不明と思っていたこの曲の冒頭が、先ほどの「命がけ」としっかりつながっている。それまで奇妙に思っていた大げさな序奏が、すんなり耳に入ってくる。ベートーヴェンは、これら最後のピアノ・ソナタにおいて、決して諦観など感じていなかったのではあるまいか？もったもったと凄く曲を作ろう、みんなをあっといわせてやろうと、燃えに燃えていたではないか。

いよいよ最後、私の大好きな32番後半楽章である。あの静けさと、ジャズ*17を思わせる不思議

な変奏が同居する後半楽章。それをポリーニは、リズムの遊びに注目する。これまで単なる繰り返しとっていたとあるフレーズが、実は数個連なって一塊りのフレーズであり、しかもそれが生き物のように姿を変え、繰り返し繰り返し不死鳥よろしく立ち現れる。「まるで音が今生まれて来ているかのように」、演奏を評するおそらく最高の言葉が頭をよぎる。そう、ポリーニは今回、（たぶん）こういう音楽を演奏したかったのだ。聴衆に聴いて欲しかったのだ。

曲は終わりに向かい、先のフレーズは徐々に音量を下げていく。さっきまで、まるで目の前にはっきり存在したフレーズの生き物、それが手からこぼれるように逃げ出してしまった感じ。しかしそこには諦観などない。生への執念、燃えさかるエネルギーを感じるばかりである。今回の演奏が、およそ200年前に亡くなったベートーヴェンの意図したものであるかどうかは分からない。もしかしたら、ベートーヴェンが怒り狂うような勘違い演奏かもしれない。普通の演奏とは大きく違うのだから。けれど、32番を頂点とする今回のプログラムには、強い説得力があった。まさに圧倒的な演奏であった。

*1：大概の人は、年を取るとせっかちになるらしい。

*2：ピアノ独奏曲の呼び方。音楽用語にソナタ形式というものもあるが、ソナタ形式で書かれたピアノ曲云々ということから、ピアノ曲をそう呼ぶようになったらしい。

*3：演奏をけなすときに使う常套句。類義語に「外面的」、「スポーツ的」。ただし、難曲(例えばリストの超絶技巧練習曲など)を指の運動のように演奏できるとかっこいい。

*4：日本で最高の音楽評論家。音楽のみならず、芸術一般を非常にわかりやすく解説する。その文章力を絶賛する物書きは数知れない。

*5：完璧だからといって、間違った鍵盤を叩かないわけではない。音楽的に最高水準という意味。実際のところは意味不明。

*6：ショパン・コンクールという、ピアニスト最高のコンクールに優勝した時、「この審査員の中で、彼より上手くピアノを弾ける者はいるだろうか?」、審査員の一人、ルービンシュタインが語ったというエピソード。なお、ルービンシュタインはクラシックファンなら知らないものない名ピアニストである。

*7：クラシック環境(だけではないが)の都市と地方の格差は大きい。一生死ぬまで、オペラを聴けないクラシックファンもいるはず。

*8：天然記念物的なクラシック音楽を、唯一全国的に放送する奇妙な企業。各種媒体を通じて、古典芸能、教育プログラムを提供する。最近のプログラムは若者に気を使いすぎ、と数十年前から言われ続けている。

*9：ベートーヴェンの作曲したピアノ曲。出版順に番号がつけられた30曲目のピアノ・ソナタ。作曲順に番号が振られているわけでないことに注意。

*10：クラシックの演奏会は、20分間の休憩を入れて約2時間*11。CD一枚ということは、休憩を入れても90分で終わる計算になる。結局のところ、アンコールを入れて2時間強という普通の演奏会であった。拍手を入れると、2時間半?!

*11：イーヴォ・ポゴレリチというピアニストがいる。2010年来日時、ごく普通のプログラムなのに、トータル4時間超という激遅演奏を披露。途中の休憩時間、「約束に遅れてごめんなさい」と電話するサラリーマンが、サントリーホールロビーにあふれた。

*12：32番には2つの楽章しかない。メルツェルというメトロノームの発明者がいる。彼がこの曲を聞いたとき、「3楽章は作らないのですか?」と質問したという。曲が終わりを迎えたことを理解できなかったわけで、ベートーヴェンもとんだ音楽オンチな友人を持ったものである。そんなエピソードで名前を残したくない。

*13：ワイルドな風貌、演奏で売るロシア出身の指揮者。わずかに残った前髪を、演奏会中しきりにかき上げる姿が微笑ましい。

*14：悩める現代を象徴するような作曲家。ただし、亡くなったのは20世紀初め。「やがて私の時代が来る」といって死んだらしい。その正否はともかく、生と死、地獄と天国が共存する何でもありのパノラマ的交響曲は現在よく演奏される。

*15：普通3楽章しかないピアノ・ソナタには珍しく、この31番は4つの楽章からなっている。

*16：遁走曲と訳される。スタートをずらされた複数のメロディーが、追いかけてこをするように聞こえる。どこか厳かな雰囲気があるため、宗教曲に多用される形式。バッハが得意とした。

*17：アメリカで19世紀初頭に発祥したいわゆる黒人音楽。年代からするとベートーヴェンが死ぬ頃には存在していたらしいが、まだヨーロッパには広まっていなかった。なのに何故ベートーヴェンはそんな曲を書いたのか？他人の空似というところだろう。

鳩山×一路 サブカル対談 第4回



私たち2人が
映画・小説・漫画等について
好き勝手に語ります。

第4回目のテーマは、映画『エンディングノート』と『監督失格』です。

あらすじ

◆砂田麻美監督『エンディングノート』二〇〇一年制作

営業マンとしてのサラリーマン人生を終え、第二の人生に踏み出した矢先に宣告されたガン。人生最期のプロジェクトとして、「エンディングノート」の作成に取り掛かる父の姿を収めたドキュメンタリー。

◆平野勝之監督『監督失格』二〇〇一年制作

三十五歳の誕生日直前に亡くなったAV女優・林由美香。元恋人であった監督と共に十四年前に撮影した自転車の旅から、死の直前までを追った、出会いと別れ、再生を描いたドキュメンタリー。

鳩山…今回は、『エンディングノート』と『監督失格』という作品です。

一路…どうでしたか。

鳩山…全く違う映画だなと思って、比較がしにくかった。

一路…本当？

鳩山…『エンディングノート』はドキュメンタリーといっても分かりやすかった。

一路…映像が凝ってたよね。

鳩山…是枝監督的な、きれいな映像を織り交ぜたり音楽も途中に挟まっていたりして、話も分かりやすく整理されてるし。死をテーマにしてたけど、『監督失格』は結果的に死ぬだけで、それがテーマというか、一種のラブストーリーだと思った。『監督失格』に関して、あんまり思い入れがないんだけど…。

一路…『エンディングノート』の方が良かった？

鳩山…そういうわけでもないけど、『監督失格』について何がよかったか、一路さんに話してもらおうかと。今回は聞き手になるのではと思って（笑）

一路…そうなんだ。確かに、結果死ぬだけなんだけど、「身近な人の死」っていうことには変わりないよね。一方は、近親者だから、お父さんが若い頃からずっと映像を撮り続けていて、死ぬってということが分か

ってからその人がどうやって段取り良くやっていくか。何か仕事っぽかったでしょ？

鳩山…仕事っぽかった。段取りって何回も言うよね。

一路…でも一方は、同じようにAV女優の若い時から映像を撮ってはいったんだけど、一度ブランクがあって、また撮り始めたところで突然死んでしまう。

鳩山…死んでるのを発見する映像が世に出るといふことはすごいよね。

一路…すごい。だからこそ、きれいに段取り良く死を迎えられた人と突然逝ってしまった人の違いが出てた。だけど、人間ってそう段取り良くいかないと思うんだよね。死に対して。余命が分かることも特殊なケースだし。かといって、『監督失格』のように突然死んでしまうわけでもない。そういう意味で両極端だし、それぞれの生活の状態も両極端で、一方はとても裕福な家庭でしょ。

鳩山…裕福だよ。美人できれいな格好した女性たちが家族にいて。

一路…息子は海外で生活して、お父さんもあわびのステーキ食べたりにして。だけど、一方は、母子家庭で父親の違う弟がいるみたい。全く違うんだけど、『エンディングノート』はお父さんが亡くなったことで、あの映像を編集していく過程でそれを解消していく、『監督失格』もあの作品を編集することで最終的には「別離」をするという終わり方をする。そういう、作品を作る姿勢は似てる感じがするんだよね。相手が好きということと起った事象と。だけど、全く極端なところにいるという。人生っていろいろあるんだなって思った。ただ、人間味のあるのは『監督失格』なんじゃないかって思う。人生そんなに段取り良くいかないって思うから。

鳩山…その点では、確かにそうだね。『監督失格』の方が人間味はあった。両方とも普通は撮れないような部分を撮ってる。普通の人がこれ撮っていいのかなって疑問に思う領域に踏み込んで、本当は撮っちゃいけないラインまで踏み込んで行って、でも本当は撮っちゃいけないっていう気持

ちと葛藤があつて。

一路：だからこそ、限界まで撮れない自分に対しての「監督失格」がタイトルなんだもんね。『エンディングノート』の方は撮るなって言われてもこっさり回したりしてて、おもしろかったね。

鳩山：あれも長年撮り続けたからこそ、撮ってるってことに周りの人が慣れてきて、自然と家族の雰囲気撮れてるんだよね。ずっと撮って来たことの集大成としての映画がある。『監督失格』の方はよく分からないんだけど、あのAV女優はどんな作品に出たの？

一路：『監督失格』は優しげな監督と売れっ子AV女優がラブラブしてるってストーリーになってるけど、実際はものすごいきわどい監督らしいわけ。やばいこととかひどいこととかさせるような。途中で爆竹とかも出てきたでしょ。

鳩山：デビュー作とかも変だったよね。まわし付けて（笑）AVの中でもきわどいジャンルにいたと。

一路：だから、あんなストーリーになって

いるのは真実と違うと考えている人もいるみたい。そもそも前半の自転車の旅も、AVを撮りに行くんだつたのに、あんなふうにな女優が監督のことを好きだからついて行くみたいな形にしたのは、事実を歪曲してるって言うてる人もいる。

鳩山：前半の旅のシーンにはAVらしいシーンがあんまり出てこないけど。

一路：実際はそういうシーンを撮りまくって、それを売りにあのAVドキュメントができたはずなのに、そういう要素を抜いてプライベート映像を中心にしてる。後半のインパクトが強いだけに、前半はもう少し短くできるよね。

鳩山：いっそAVのシーンを抜かない方が良かったと思う。前半の旅の位置づけがふわふわした感じだから、ただの一般のカップルが撮ってるプライベートムービーみたいに感じてしまった。途中の会話も面白いけどね。男友達に手紙を送って喧嘩になり、監督が奥さんに電話をかけて喧嘩になって、「あ、なるほどね」とか軽いノリで言ってるるところとか（笑）

一路：撮る視点が独特だよな。「自分込み」って感じ。『エンディングノート』は、家族だからまあ自分も絡んではいるけど、中心はお父さんになってるもんね。だからこそ、あのお父さんになりきってるナレーションが入っていて。監督自身はあんまり出てこない。末っ子は段取り悪いみたいなのと言ってるぐらいで。身を切ってるって感じはあんまりしないかな。家族を売りに出したぐらいで。

鳩山：『監督失格』は自分も入ってるし、その周りの人も面白いよね。最終的に弟子のペヤングとか（笑）あの全体像が面白かった。駄目な大人たちの関係性が。決して否定してるわけじゃなくて。確かに全然違う社会だよな。一方はきれいで裕福な。

一路：死んで新聞に載るような人だし、それだけ大きな会社ってことだもんね。普通の人じゃあまり考えられない。まあ一方も新聞に載ってたけど、スポーツ紙に一面みたいなの。

鳩山：確かに両方載ってたね。AV女優の方が記事自体は大きかった。

一路：そういえば、お父さんみたいなお母さん出てきたね（笑）

一路：お母さん、本当にお父さんみたいだった（笑）

鳩山：あの女優さんも、いろんな苦しみがあっただろうけど、もうちょっと何か違ったら、抜け出せたような気もするんだけど。

一路：でも、エロで救われたみたいな発言があったりして、結構AVの仕事に誇りを持ってたんじゃないかな。伝説の女優って言われるぐらい有名だったみたいだし。

鳩山：そうなんだ。

一路：かわいそうだよな。「普通の家庭を築きたい」とか言いながら、孤独死するなんて。

鳩山：意外な感じだったな。二十六歳とかでそんな発言してるから、もっと早い段階で結婚したりとかそういう方向にもいけたんじゃないかな。

一路：誰にもわからないまま孤独死なんて辛いよね。

鳩山：でも、気付いてくれる人がいただけ良かったよね。

一路：でも監督はあの女優を本当に好きだったのかな。

鳩山：そんな風に思う？

一路：だって、あの女優を撮ることで監督はご飯が食べれてたわけで、ブランドを置いたときは全く作品ができなくて、またあの映像を使って良いっていう許可が出たことでまたご飯が食べれる。好きで、封印された死の映像を何度も見返すという苦しい作業をしたうえで区切りをつける意味であの作品が生み出されたのか、それとも今後の監督人生を考えた上で許可の出たあの映像を盛り込んだ映画を発表したのか。作り手という視点と、監督自身の思いと、入り混じってすごく複雑だなと思った。

昨今の『就活』ブーム

鳩山：話題は変わるんだけど、「就活」みたいな言葉が世の中にはどんどん増えて

るよね。「婚活」とか。今回の映画のキャッチコピーには「終活」って言葉が使われて。この前「離活」って言うのもテレビでやってた。財産分与とか離婚のための条件を自分に優位に持っていくための活動を「離活」っていうらしい。「離婚式」もあるんだって。

一路：そんなものもあるの？

鳩山：友人を集めて、夫婦最後の共同作業とか言って指環を叩き壊したり、離婚に至るまでの経緯を流したりしてね。何年何月に夫の浮気が発覚とか。

一路：いつ離婚式をやるんだろう。顔も見たくないみたいな感じで離婚するんだったら、式も何もないよね。円満離婚のときなのかな。

鳩山：テレビに出てたカップルは、離婚は二年前にすでにして、奥さんの方が子ども連れで再度恋愛とかしたいけどもやもやして整理がつかないから、あえて離婚後に離婚式をしたって。旦那さんは未練があつてよりを戻したかったみたいだけど。離婚は旦那が原因なんだけど、後半何年

間かはずっと浮気してて。式としては、夫婦二人が人力車に乗ってその後ろを友人が連なって街を練り歩くとか、離婚の経緯を参列者の前で発表した後に、指環を壊して、みんなでご飯食べるの。

一路…へえ。

鳩山…奥さんの方は、気持ちがあすつきりしたとか言ってたし、やっぱりそういう儀式的なものに頼って気持ちを整理するところがあるんじゃない。失恋したら髪を切るとか、引越しをすとか。『監督失格』のお母さんも家を買って替えたとか言ってたし。それだけ人間の気持ちはコントロールが難しいもので、その状態に対して儀式を行わないと整理できないのかもしれない。

一路…儀式って神的な感じがするんだけどね。思ったんだけど、結婚式はだいたいが神に誓うっていう形だけど、離婚式は誰に向かっているの？

鳩山…その場に来た人。

一路…来た人に認められて離婚するんだ。鳩山…離婚式をやることで、逆に離婚を思

いとどまったり気持ちに整理がついて離婚できたりっていろいろあるみたい。だけど基本的には自分の気持ちのためにやる。一路…なるほど。

鳩山…そもそも「就活」とか「婚活」とか、そんなに以前からあった言葉ではないよね。

婚活っていう言葉が流行る前は、皆が同じような年齢になったら一律で結婚しなきゃいけないって世の中の風潮をよしとしないような、自由化の時代があったと思うんだよね。女性の社会進出が持て囃されたりして。でも実際、未婚化や晩婚化っていうのは、社会にとって絶対的に良いことではないわけで。個人的な部分でも、やっぱり結婚しときたいって人達も大部分いて、それを一昔前に単純に戻すんじゃないかって、自主的に皆が結婚を目指す社会なんですってことで、「婚活」って言葉が出てきたように思う。「婚活」って言葉を使えば、

嫌々させられる感じも少ない上に、それなりに社会的にも推奨されている行為ってイメージになるよね。ソフトな感じで活

動をしなければ結婚ってできないものなんだってイメージを植え付けられてるような。

一路…「婚活」っていう名前が付くことでしなないといけないものになる。昔も婚活を自由にやっていたんだけど、名前が付いた時点から強制的なものに変わったのかもしれないね。でもまあそれによって婚活ビジネスも出て、やりやすくなったっていう部分もあるんだろうけど。

鳩山…努力をしなければ結婚ってできないものなんだって危機感を与えることが「婚活」って言葉の機能だよ。社会的に若者たちにプレッシャーをかけてる。だけど、そのプレッシャーはある年代の人達に一律でかけられるプレッシャーであって、自分だけがモテないから、必死に結婚相手を探しているような感じではない。そういう感じが世の中で受け入れられやすくて、これだけ流行っていったのかもね。

「婚活」や「終活」って言葉も一緒に、何かをするためには、ただ漫然とその時を待つんじゃないって、努力して活動して、よ

り良い結果を自分で導き出さなくちゃいけないものだって認識や、そういう風に努力する人を良しとするような機能があるんだね。だけど、何でもかんでもポジティブなものとして捉えて、感情を整理整頓して、いろんな活動に精を出すなんて風潮、個人的には違和感を感じます。

上手い死に方・下手な死に方

一路：『エンディングノート』って、観客の年齢層もわりと高めで、うちの親とかも話題にしてたし、そういうことを記載するノートも売れてたりとか、最近の時代の流れに合ってる映画って感じがする。映画に対する需要があるんじゃないかな。

鳩山：葬式場のCMだったか、息子が親にどんな葬式が良いって聞くっていうのがあって、それも親孝行の一つですとか言ってた。

一路：映画の中でも、お父さんがどうした

いか集まって聞いて、親孝行って感じはあったね。故人の遺志を尊重する、というか。鳩山：私は、今生きてる時間をお葬式のことを考えるために使っちゃって嫌だけど、「結婚」したいんであって、「結婚式」をするために結婚するわけではないのと同じ。

一路：『死ぬまでにしたい10のこと』とか『最高の人生の見つけ方』とかの映画だと、死ぬ前にやり残したことをやっちゃって風になるでしょ。世界一周とかさ。鳩山：あったね。「もう一度恋をする」とか。

一路：そうそう。でもそうじゃなくて、完全に死んだ後のことを考えてたところが面白いよね。

鳩山：葬式場の下見まで行って。

一路：下見に行くから、てっきり「生前葬」をやるのかと思ったよ。生きてる人が死ぬ前に自分自身で自分の葬式をやっちゃってうっていう。

鳩山：そんなものもあるんだ。それってどういう意味があるんだろう。

一路：お別れを言いたいんでしょ。みんな

突然死んじやうから、その前に言い残したことがないようにしたいんじゃない。

鳩山：だったら分からなくもないけど、病室に来てもらえばいい。周りを困らせないためっていうのはあるのかもね。

一路：お母さんは何もできないからとか言ってたもんね。残された方が書いてもらったほうがいい。私なんて親から、若い人も書いといた方がいいとか言われて。「連絡してほしい人なんていません」とか言っちゃったよ(笑)

鳩山：なんか悲しくなってきた。映画の中でも「うまく死ぬるか」ってナレーションがあっただけど、うまく死ぬるも何もなからうと思っただけ。

一路：どういふ死に方がいいかってことなのか。でも死に方は選べないもんね。結果的に孤独死かもしれないし、家族に見守られながらかもしれない。逆に何年も前に書いたエンディングノートを掘り出され、関係ない人に連絡されちゃったりしてね(笑)

鳩山：誰が友人かとか、生きてる間に話し

てるから一人ぐらい名前知ってるでしょ。もうそれでいいんじゃない。あとは伝わる人にきちんと伝わるから、残った人が適当に思い出して連絡してくれば。

一路：お父さんが死ぬ時に、最終確認して言ってたね。漏れてても重要な人には伝わるだろうって。

鳩山：さっきも一路さんが言ってたけど、『エンディングノート』が上手い死に方を描いた映画だとしたら、『監督失格』は完全に下手な死に方を描いた映画だね。全体的に、何とか活動とか葬式の手配を自分でする感じとか、行為を型にすることで、言葉にすることができないような、自分でもどうにもできない感情というものを切り捨てようとしているような感じがする。前回の『悪人』の回で、感情は感情のまま伝わらないから、行為に落とし込む必要があるって話になったと思うけど。それはそうだと思うんだけど、あまりにも人々の気持ちや形式や型に向かっていって、どうにもならないコントロールできない部分が切り捨てられようとしている感じが、ちょ

っと、それで良いのかなって思う。一方で、よくあるお涙頂戴物というか、恋人が死んでしまうっていうメロドラマみたいなのが良いかっていうと、それはそれで違和感があるわけだけどね（笑）

パイヌとペンギン

連載第4回

いちろ まみ

あらすじ

ペンちゃんは、南極大学から日本のある大学に留学中。この物語は、ペンちゃんと相棒のイヌが織りなす不思議なお話。

第7話 クラコンに行く

授業の終わりと共に、クラス委員が言いました。

「来週、授業の後にクラスコンパやりませんか？ ポウリングしてから食事って感じで」

ペンギンのペンちゃんにとつて、初めてのクラコンです。イヌが隣でこそそ言いました。

「ペンちゃん、ポウリングしたことあるわふ？」

ペンちゃんは黒く光ったひれを見つめながら言いました。「ないぺひ」

当日。

大音量の音楽とピンの倒れる音がせわしなくしているフロアに、ペンちゃんたち一行は集合していました。ペンちゃんにとつては全てが初めての経験です。ピンが全部倒れる。振り返る。みんなに駆け寄る。拍手したり、ハイタッチしたり、みんな笑顔でとっても嬉しそう。各レーンで喜んでいる人々の様子を見ながら、ペンちゃんは勉強しています。

「ピンを全部倒せばいいぺひ」

ペンちゃんは、椅子に座って足ひれをぶらぶらさせながら各レーンを見ていました。それに気付いたイヌが遠くから言いました。

「ペンちゃん！ まずは靴を買って、ボールを選ぶわう！」

ペンちゃんは鮮やかな水色のボールにしました。足ひれに、緑色をしたマジックテーパー靴を履きます。いつものように、ぺたぺたという音はしません。代わりに、かぼかぼという音がします。サイズが合わなかったようです。

クラス委員が先頭を切ってボールを投げました。投げ終わったときに、足を斜めに流します。なんと、一投目からストライク。

「すごいぺひ！」

ペンちゃんはひれを叩いて喜びました。予習通りです。

次にイヌが投げます。肉球がすべってうまく投げられませんでした。でも4本倒れました。

「イヌ、すごいぺひ」

また声をかけます。しかし、みんなは隣の人とおしゃべり

したり、ジュースを買いに行ったりし始めました。何だか白々しい雰囲気が始めます。

「みんなパフォーマンスをしてるべき……」

うまくいったときは大きく喜び、何とも言えないときは見ていなかったようにして、声をかけずに自分の好きなことを始めます。その次も、その次も。みんなボールの行方を見ているのだけど、だからといって何か言うわけではありません。ポウリングの時間は、単にゲームと言っても意外と心理が表れているのだとペンちゃんは気付きました。みんなが来たとはいえ、あくまで個人競技なのです。投げ終わった人にどうやって声をかければよいか、ペンちゃんが窺っていると、

「次、ペンちゃんの番わふ」

とイヌが教えてくれました。

ついに、ペンちゃんの一投目。緊張した面持ちで、ペンちゃんはひれ先を風に当てて乾かしてから、ボールの穴に入れました。かぼかぼした足で歩きます。まぶしいほどの光が茶色のレーンに当たり、輝いています。先ほどまでいた場所とは全く違う、何か神聖な地に一歩ずつ足を踏み入れていくような感じでした。

「べい！」

ペンちゃんは、レーンぎりぎりのところで力いっぱいボールを投げました。

しかし、ひれが思ったように抜けません。思い切り振った拍子にペンちゃんはこけ、ひれ先が入ったままのボールが滑り始めます。ペンちゃんはボールに引きずられるように、そのままレーンを滑ります。

「わふ！ ペンちゃんが滑ってるわふ！」

まるで、氷の上を滑っていくペンギンのように、腹ばいになってレーンを進むペンちゃん。

「べひ！ 抜けなひべひ！」

目の前にある水色のボールが、まるで南極の海のように輝いています。だんだんピンが迫ってきました。

そのとき、イヌが走ってきてペンちゃんのおしりに飛びつきました。両前足でしっかりと掴みます。

これで安心かと思いきや、それでも勢いは止まらず、イヌも一緒に引きずられていきます。後ろ足でしっかりと踏ん張りますが、ずりずりと滑っていきます。

「助けてわふ！」

それを見たクラスのみんなが、イヌとペンちゃんに向けて駆け出しました。クラスのみんながイヌの体を引っ張り、まるでみんなで力を合わせてペンちゃんを釣っているような格好になりました。

そして、ボールがピンに触れて勢いよく倒れ始めたとき、みんなの力でようやくペンちゃんの体は止まりました。

みんなが代わる代わるペンちゃんに寄ってきて、大丈夫だったか尋ねます。そのとき、上の画面にストライクの文字が出ました。ペンちゃんは、ようやくボールから離れたひれを

高く上げて喜びました。

「全部倒したべひ！」

次の番からはみんなにボールを両ひれで持って投げるように言われてしまったぺんちゃん。でも、ぺんちゃんの番になったら、ポウリング場にいるみんなが心配になって見にきます。他のレーンの人も、清掃の人も。ぺんちゃんの番がきたらみんなが一体になってくれるような気がして、ポウリングがとても好きになったぺんちゃんなのでした。

第8話 ペんちゃんの回想

ペンギンのぺんちゃんは、クラコン後の帰り道に南極のことを思い出していました。

一緒に帰っていたイ又は言いました。

「ぐるぐる。ぺんちゃん、何か考え事してるわふ。イ又はすぐ分かるわふ」

それを聞いて、ぺんちゃんは言いました。

「こめんぺい。ちよつと南極大学のクラコンを思い出してたべぎ」

ぺたぺたぺたぺた。たつたつたつたつ。ぺたぺたぺたぺた。たつたつたつたつ。

イ又とぺんちゃんは、みんなと別れた後、夜道を歩いて帰っています。二匹の足音が夜の町に響きます。月が明るく照らしてくれていました。

南極のペンギンたちはしばしば親睦を深める氷の会を開きます。コンパというものではありません。氷の会とは、氷を使った遊びをする会合のことです。

ある日、氷の会係のペンギンが言いました。

「今日の氷の会はカーリングをしよう！」

その一声でクラスのみんながそれぞれ、掃除用工具箱に入っていたデッキブラシやほうきなどを持ち出しました。足りない分は家から持ち寄ります。みんなが氷山に集合しました。ぺんちゃんは、はしゃいでひれを振り回しながら言いました。

「今日は優勝するべい！」

カーリングとは、氷をこすることで転がしたボールの速さや方向を変えて、最終的に円の中心に入れるというスポーツです。さあいよいよ氷の会をスタートするぞというとき、氷の会係が気付きました。

「あつ！ ボールがない！」

そうです。以前氷の会でカーリングをしたとき、ボールを滑らせすぎて海に落っこしてしまっただけです。カーリングのボールは重いので、一度沈んでしまったら南極に住むみんなの力を借りない限り二度と浮かび上がりません。困ったみんなはボールの代わりを考え始めました。うくん、うくん、うくん。みんなひれを胸辺りで組み、首をかしげたり頭をふるふると振ったり。

「貝はどう？」「いやあ、小さすぎるよ」

「魚はどう？」「氷の上だと、死んでしまうよ」

「氷の塊はどう？」「滑りすぎてしまうよ」

みんなが途方にくれていたとき、一匹のペンギンが言いました。

「僕の弟はどう？」

弟ももちろんペンギンです。

子どものペンギンはまだお腹で滑る練習をしているところで、それほど遠くまで滑ることができません。滑りすぎず滑らなすぎず、摩擦を起こすのでボールの代わりには最適です。それがいい、とみんなで意見が一致しました。

ガリガリと氷を彫って円を描き、ようやく氷の会のスタートです。

チーム分けして、リーグ戦となりました。まずはペンちゃんチームからです。

灰色の弟ペンギンが、滑り投げられます。その前を一齐にみんなが掃き始めました。

ゴシゴシ、ゴシゴシゴシ。ペンちゃんもブラシで一息懸命に掃きます。ゴシゴシ、ゴシゴシゴシ。

だんだんと弟ペンギンの動きが遅くなってきて、円に頭が入りました。

「もう少しべい！」

しかし、ペンちゃんの願いもむなしく、弟ペンギンは胸まで入ったところでストップしてしまいました。円の中心に入ったとはいえませんが。

次のチームの番ですが、ボールが1つしかないのです。円に記しをつけた後もう一度同じ弟ペンギンが滑り投げられませんでした。

ゴシゴシ、ゴシゴシ。今度はもっと早く勢いがなくなってきました。

「よしっ！ 勝ったべい！」

ペンちゃんはひれにぐっと力を入れ、勝利を確信しました。円に頭が入る前にストップすると誰もが思いました。

ところが、突然速度が上がりました。

スイーツ。

最後の力を振り絞るかのように弟ペンギンの体が前に進み、円の中心で止まってしまったのです。チームのみんなどは大喜びしました。

「奇跡が起きたぞ！」

ぺんちゃんのチームは分かっていました。対戦相手のチームには、お兄ちゃんペンギンがいたのです。弟ペンギンがお兄ちゃんチームを勝たせるために、わざとひれを動かして円の中心まで滑ったのでした。

いいえ、ぺんちゃんのチームだけではありません。お兄ちゃんチームのみんなも分かっていたはずですよ。弟ペンギンよりも何倍も滑りが得意で、もう何年も氷の上を滑り続けているのですから。

しかし、みんな弟の気持ちを考えて、喜んだり悲しんだり演技をしました。協力した弟ペンギンへのお礼でした。

「良い話わふねえ」

イヌがうっとりしながら言いました。

「пей。でも、家に帰ってからお兄ちゃんペンギンが怒ったらしいべき。勝負は勝負。イカサマはだめпей」

「イヌもカーリングしてみたいわふ」

イヌが目をキラキラさせながら言いました。

「じゃあ、冬に雪が降って氷になったら、みんなでするпей」

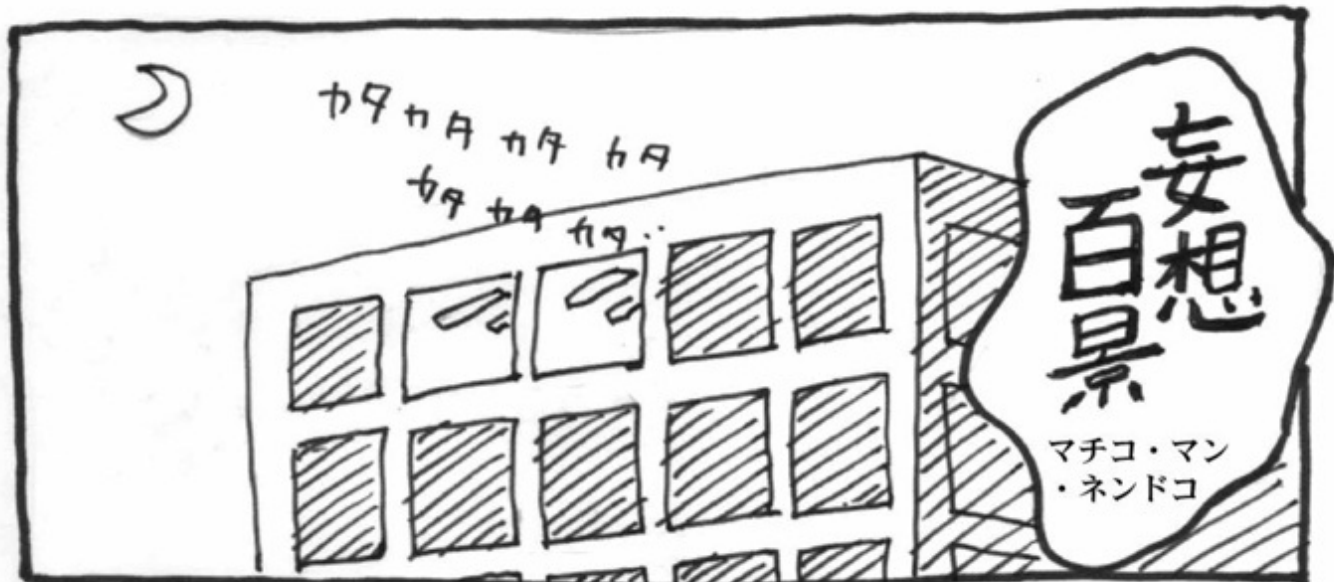
ぺんちゃんはイヌの背中をべしっと叩いて言いました。
イヌとぺんちゃんの家はまだまだ遠く、二匹は夜道を歩き続けます。

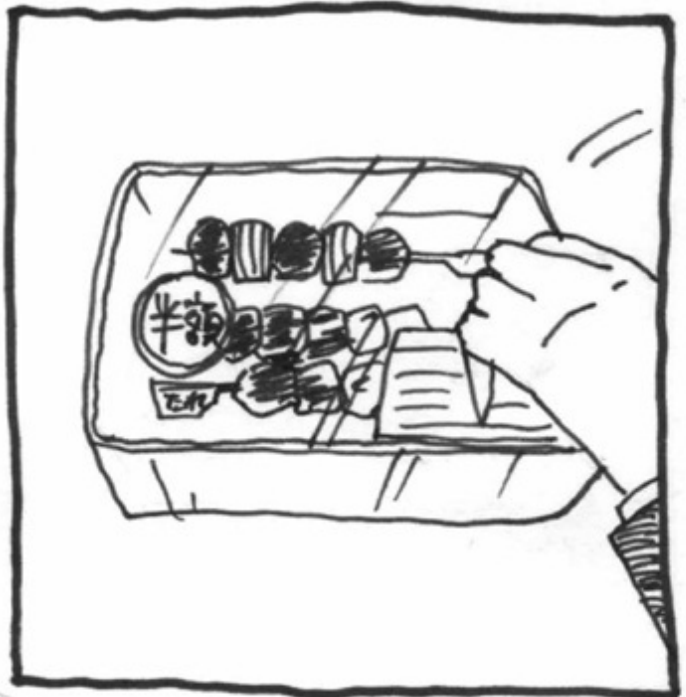
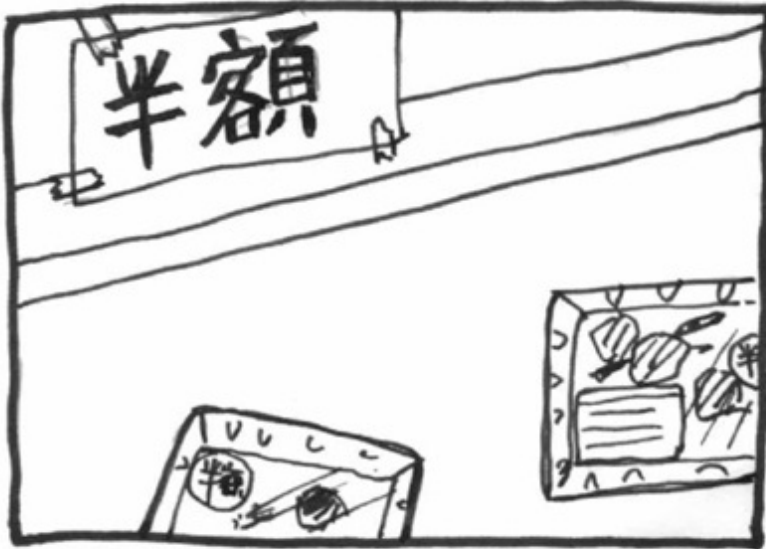
「じゃあ今度はイヌの話をするわふ」

次回は、イヌの回想のお話です。

(つづく)









ヨロコブデ：

ドゥッキーン



僕と
ディナーでも：

貴女、そんな
半額のヤキトリより
：どうですか？



：アラヤダ！
ヤダッタラ
ヤンヤン！

ずっと貴女のこと
見てました：
深夜のスーパで：

Fin



ないよ

：みたいな出会い
ないかなー

おわり

About movie

今日見た映画…「八日目の蝉」(2011年4月公開)

公式HP : <http://www.youkame.com/index.html>

この映画には男がない。恋愛も家庭もあって女も子供もいるのに、男はどこにもいない。諸悪の根源と言ってもよい父親が、誰かから責められるシーンは一度もない。同じ立場となる主人公の恋人を責める人間もどこにもいない。

主人公は自分の父親と同じように家庭を持ちながら自分とも関係を持つ恋人に言う。バレバレなのに嘘をつこうとするところが好きよ。

だけど、そんな男では父親にはなれない。

子供が母親に聞く。女ってなあに。男ってなあに。母親は答える。あなたが大きくなって、誰かと結婚したいと思ったら、その人が男の人よ。

だけど、女が愛する男は決して父親にはなれないのだ。

この映画には女が二人、いる。母親になれなかった二人の女。子供を産むことで女は優位に立とうとする。子供を殺すことで女はからっぽになる。二人は女だ。だけどどちらも母親ではない。女であることと母親であることは全く別のことなのだ。

男を愛することができないから母親になれないのだろうか。子どもを愛することができないから母親になれないのだろうか。それとも自分を愛せないから？

逃げる母子の前に、女しかない世界が現れる。その世界は限られた期間ではあるが、母子を守る真綿となる。世界は問う。女とか男とかこだわりを捨てたら、たましいになれるよ。

だけどその世界はやがて崩壊する。そして女は気づく。世界中の美しいものは、真綿の世界の外にあると。

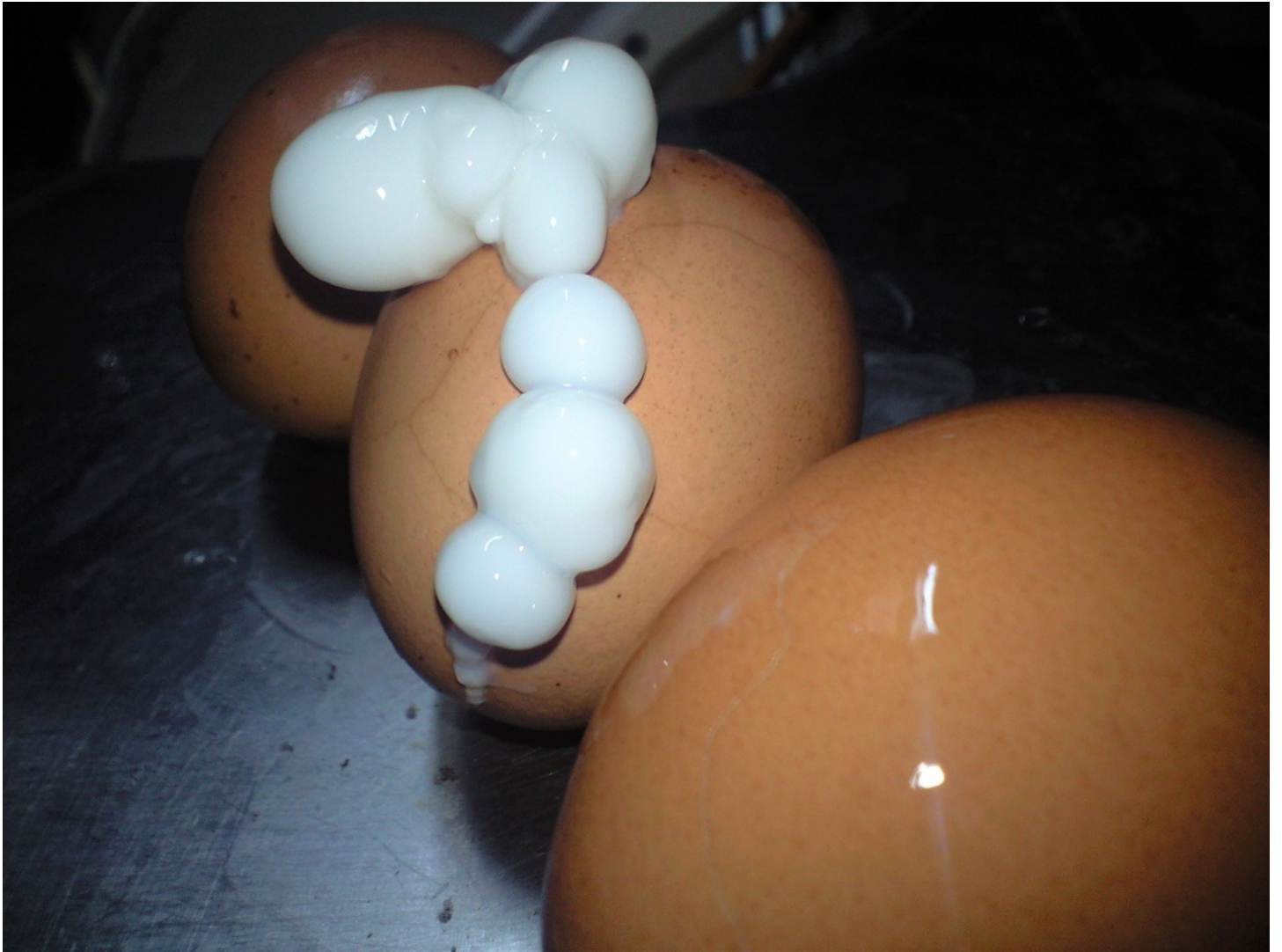
そこは、誰かを愛しても幸福にはなれないかもしれない世界。

それでも、誰かを愛さずにはいられない世界。

何が正しいのかなんてわたしには分からない。

けどもうわたしはあなたを愛している。

鳩山 豆子 (はとやま まめこ) : 1982年生まれ山口県出身。映画をコヨナク愛する。
最近おもしろかった映画は「ピュ〜びる」。



K区役所愛情創出室

一路真実

1

「え？」

聞き返したサチコに、顔を近づけた遠藤は小声だがはっきりとした調子で繰り返した。

「だから、僕は土居さんが今までしてきた恋愛を全て知ってるよ」

サラリーマンでひしめく居酒屋の喧騒から、遠藤の言葉を一言一句漏らさずに聞き取ったものの、翻訳するのにあまりにも時間がかかり、サチコはしきりに前髪を触ってうつむき加減に呟いた。

「すみません、ちょっとトイレに行ってもいいですか」

慌てて立ち上がり、他の客にぶつかりながら急いでトイレへ駆け込む。

――私の恋愛を全て知っている？

今朝、サチコは就職活動以来、陽に当てていなかったスーツを身に着け、S市役所の新入職員として辞令を受けていた。配属先の先輩職員に付き添われ、同期が一人また一人と部屋を出ていく中、サチコ一人だけが最後までだだっ広い会議室に残された。そして、ようやくふらっと現れた遠藤に連れて行かれた場所は、K区役所の暗い一室であった。

「ようこそ、社会愛形成部愛情創出室へ。ここが、君の部屋。自由に使っていいよ」

きょろきょろと見回したが、部屋には窓がなく、壁が所々剥げ落ち、書類に埋もれた机に一台のパソコンが置いてある。まるで隔離された病室のような冷たい空気が漂う。遠藤はそれだけを淡々と告げると、部屋を出て行こうとした。

「ちょっと待ってください。他の職員はどこにいるんですか」

「愛情創出室は婚姻課内にある課内室なんだ。ただ業務内容が少し違うから、分室になってるんだよ。室長は課長が兼務、職員は土居さんしかいないよ。俺も本室の婚姻係にいるから、土居さんへ引き継ぎが終わるまでは業務に関わるし、心配なくていいよ」

サチコは黒光りするリクルートバックから、慌てて今朝配布された組織図を取り出した。

「社会愛形成部……」

社会愛形成部の中には、婚姻課、子育て課、男女参画課など、家族形成に関する課が並び、婚姻課には婚姻係を始め複数の係名が記載されているが、愛情創出室などという名前はどこにも存在しない。

「そんな名前ないですけど」

「ここは極秘部署だから、パンフレットにも組織図にも書かれない。表向きには土居さんは婚姻係所属ということになっている。この室の存在は婚姻課の人にさえほぼ知られていないんだ」

と、遠藤は当たり前の呪文を繰り返すように澁みなく言った。

「一体、何の仕事をするんですか？」

「世間から隠されている秘密を扱う部署、とだけ言っとくよ。今夜、歓迎会するからその時にでも」

そう言うと、遠藤はそそくさと出て行ってしまった。

その日の夜、遠藤とサチコは、居酒屋のカウンターに並んで座っていた。酔っ払って赤い顔をした課長がサチコたちに言う。

「土居さんは期待の新人だからね。立派に遠藤君の仕事を引き継いでもらわないと」

はあ、と曖昧な返事をしながら、お通しで出された切干大根を箸でつついた。

「私も、十年目でやっと後輩ができましたからね。これで心置きなく異動できます」

「長くなって悪かったなあ」

サチコを挟んで、二人が笑いながらビールジョッキを合わせて乾杯した。自分も遠藤のようにこの先十年間もあの密閉された檻の中で、一人で同じ仕事をするのかと思うと、サチコは気が気でならなかった。その様子を察してか、課長が檄を飛ばした。

「これは重要な政策なんだよ。大きな声では言えないが、人は政府の恋愛施策がないと、結婚もできないし、子孫が残せない生き物なんだ」

しばらくして、課長は婚姻課の歓迎会へと慌てて戻って行った。課内室とはいえ、サチコは業務の秘匿性により他の課員との接触を極力避けねばならず、同じ課でも存在が認識されていない。ゆえにサチコは課の歓迎会にも出席を許されておらず、不憫に思った遠藤と二人きりで歓迎会が再開されたのだった。

そして、その時に言われた言葉が、

「僕は土居さんが今までしてきた恋愛を全て知ってるよ」

である。

サチコは便座に腰掛け、頭の中を冷静に整理しようとしたが、お酒のせいか余計に思考が絡まり、心臓がドンドンと合の手を入れる。しばらくしてようやく席に戻ると、遠藤に向き直り言った。

「結局、私の仕事は何なんですか」

「土居さんは自由恋愛を信じてる？」

「話を逸らさないでください」

「何かに恋愛を煽られていると感じたことはない？ 例えば、漫画や小説、映画に音楽、コマーシャルにまで、街には恋だの愛だのをテーマにしたものが溢れているよね」

「そうですね」

サチコはジョッキを持ち上げ、泡の消えたビールを一口飲んだ。

「君の恋愛は、本当に君が選択したものなのかな？」

そう言うと、遠藤はサチコの瞳を覗き込んだ。

「恋に落ちたんじゃなくて、誰かに落とされたんだとしたら？」

サチコは目を逸らして笑った。

「遠藤さん、冗談が過ぎますよ」

「そうだね。土居さんは大学時代の井上君のことをまだ忘れてないから、新たな恋はできないんだろう」

そう言うと、遠藤は素知らぬ顔をして皿に盛られた唐揚げをひょいと摘んだ。

「……どうして、井上君のことを知ってるんですか」

「井上君がした浮気は、僕が仕掛けたことだからね」

次の日から、誰もいない部屋の中で、膨大な資料の間で電子チップの山と格闘する日々が始まった。取扱注意と書かれたファイルを開くと、愛情創出室の業務内容がびっしり書かれている。

「三十年前の研究で、既に恋愛能力の欠けた人間が誕生し続けていることが分かっています。人類は生殖機能があっても子孫を残せない生物になってしまいました」

サチコはまず、電子チップを専用デッキに差し込んだ。液晶画面には、ターゲットの名前や経歴、これまでの恋愛特性や経験などが細かい字で羅列されている。

「まず、ターゲットの個体特性を把握し、目標を定めること」

データの最後に、赤字で最終恋愛期間まであと二週間と明記されていた。これが目標値であり、この期間までに相手と恋愛状態にさせることが最終目標である。コンピュータが恋愛相手を自動的に弾き出すため、後は人工的にその相手に出会わせるように設定を付与する。コンピュータも、最終的に結婚までいくカップルは予想できない。役所の職員が、うまく婚姻関係を結んで、子どもを増加させるように手助けをするというわけだ。これがサチコの仕事であった。

突然部屋のドアが開いて、遠藤が入って来た。

「これ、あと三週間のもの」

両手に抱えられたケースにはどっさり電子チップが入っていた。

「まだ、二週間のものもこんなにあるのに」

サチコの隣には同じケースが数箱積み重ねられていた。

「一週間までの分は俺が処理したんだから、これからは君の仕事だよ」

「もし、処理しきれなかったら？」

「処理しきれなかったら、ターゲットが恋愛のチャンスを失う。それだけのことだよ。ただ、市民の恋愛を妨害すると同時に、その後生まれる子ども数の減少につながる。その経済的損失は測りきれないだろうね。君の失敗が人口の減少をもたらす可能性があるんだ」

「どうして、そんな重要なことを新人の私がするんですか」

サチコが苛立って声を荒げると、遠藤は口元に笑みを浮かべてたしなめた。

「土居さん、今までは誰かに御膳立てされていたことを今度は君がしていくんだ。社会はそういう風に回っているんだよ」

遠藤が出ていくのを見送ると、サチコは大きくため息をついた。

全ては画面上での操作で、現実味は全くない。電子チップの情報をひたすら書き換えていくだけだ。他のデータとの整合性を図ることが一番重要で、書き換える部分を誤れば人々の関係が狂っていく。サチコは一言一句指でなぞりながら確認した。

「坂本伸一と木下瞳を公園で出会わせる、と」

自分が今までしてきた恋愛も、こうして誰かがチェックし、コンピュータ上で操作されたことだったのかと思うと、これまでの恋愛が突然色あせていくように感じた。

次の日も、次の日も、連日深夜までサチコは書類と画面のにらめっこを続けていた。毎日のように、サチコが処理したファイルを抱えて遠藤が部屋に入って来る。

「土居さんが処理したこの件だけど」

目の前にファイルを広げ、遠藤は文字をなぞるように指を這わせた。

「齋藤美由紀が竹内信彦と離婚するのが、五月十四日」

遠藤は別のファイルを上に置き、ぺらぺらと紙を捲る。

「ここには、石田義勝と齋藤美由紀は五月十三日に付き合い始めることになってる」

「それが何ですか」

遠藤はサチコの反応が分かっていたように、すかさず

「一日重なってるじゃないか」

と言った。壁から、隣の婚姻課の楽しそうな話し声が響いてくる。

「これじゃ、不倫関係になってしまうだろう」

サチコは手に持っていたペンを机に乱暴に投げると、遠藤の方を見上げた。

「遠藤さんは、井上君が浮気する設定を作ったのに、不倫関係のことは口出しするんですね」

井上はサチコの前の彼氏だ。あの居酒屋での発言以来、サチコはこのことをずっと気にしていたのである。ここで仕返ししなければとばかりに、思い切り気持ちをぶつけた。しかし、遠藤は至って冷静で、

「土居さん、不倫は法律上では貞操義務の不履行にあたるんだよ。適当な相手が見つからない時は、そういう処理をする場合もあるけど、このケースはそれを確かめたの？ リスクを避けて仕事してくれないかな」

と苦言を呈した。ドアを開け、出ていく直前に、

「浮気は法律上の問題はないよ。道徳の問題だからね。結ばれる可能性のないカップルには、とりあえず浮気の設定を付けておくと、後から処理が楽だよ」

と事務的に言ってにこりと笑った。

遠藤が出て行き、サチコは机に突っ伏した。

(私は、操り人形なんだな。誰かの恋愛を裏で操ってる振りをしながら、実は遠藤さんや課長や部長や、いろんな人にただ操られてるだけなんだ。)

しばらくしてゆっくりと顔を上げると、目からこぼれるものを拭きながら、こみ上げる怒りを必死で抑えて画面上の数字を一日書き直した。

ドアが開く音を聞いたが、サチコは視線も上げずにタイプを続けている。部屋にはカチャカチャという音だけが鳴り響く。すると、近づいてきた遠藤がサチコの資料の上にわざとらしくどきっとファイルを置き、声を掛けてきた。

「土居さん、この文言だけど」

サチコは、またか、と思った。遠藤は細かい箇所を指摘し過ぎる。それによって期限を超えそうになるのが、サチコは不満であった。だるい体を持ち上げて、遠藤の指先が示す箇所を覗き込む。

「寺田翔平は立花薫と出会ったが、打合せに来ていた武井善治のことが忘れられなかった」

遠藤が淡々と読み上げる。

ターゲットである寺田翔平は、二週間後に立花薫とくっつかなくてはならない。しかし、寺田の交友関係には立花薫と接点があるような女性が全くなく、サチコは無理やり立花薫と居酒屋で出会うという設定を追加した。しかし、立花薫は電子データ上では恋愛の時期に来ていない。それは前回付与された設定で、仕事上で知り合った武井善治と恋愛関係になっていたからだ。そこで、あえてサチコは立花薫と武井善治の関係をこじらせることにして、立花薫の恋愛時期をずらしたのだった。

「立花薫は武井善治と一緒に連れていた同僚である新藤恵美を武井の彼女だと勘違いし、失恋したと思いきや。そう書いてあるよね」

「そうですけど」

最近サチコは遠藤のこうした物言いが癪にさわる。言いたいことを端的に言わず、サチコが書いた文言をさも不自然な呪文のように一言一句読みあげ、じわじわと追い詰めるのだ。

「でも、この日、立花薫が武井善治と出会うことは不可能だよ。武井善治は江藤一と出張に行っている。これは君が後から回してきたこっちのファイルに記載されていた、江藤一と鈴木圭子が出会うために必要な事項だったろう。出張先で元クラスメイトの武井と鈴木が偶然出会って江藤を紹介するんだから」

「……そうです」

「もう一度見直して」

書類が積み上げられた机に、遠藤は抱えてきたファイルを無造作にどンドン置いて出て行った。一人になると、サチコは激しく苛立った。

「そもそも、立花薫と武井善治の設定を作ったのは遠藤さんじゃない。遠藤さんの設定だって、特に必要じゃなかったけど別の恋愛関係を作り出すためだったはずなのに。どうして私がその設定に振りまわされないといけないのよ」

サチコは電子チップを差し、さっさと処理しようと打ちかえ始めた。

「立花薫は昔の友人から連絡を受け、武井善治が事故で亡くなったことを聞かされた」

次の日、サチコが出勤するとすぐに遠藤が部屋に入って来た。

「土居さん、ちょっといいかな」

「何ですか」

「君は法律をちゃんと読んだのか」

「え？」

遠藤は分厚いファイルをサチコの目の前に置き、堅苦しく音読した。

「第百十八条 第三条以外の情報をむやみに書換えることを禁ずる。ただし、第二十条の場合を除く」

遠藤は、次に第三条と第二十条を開いて淡々と読み上げた。

「つまり、恋愛に関するもの以外は書き換えちゃいけないってことだよ。君の作った、武井善治が死ぬという設定は法律違反だってこと」

そう言って遠藤は出て行った。サチコの印鑑だけがぽつんと押されたファイルがまた戻って来た。

「法律をきちんと読んで」

遠藤の言葉が頭をよぎる。恋愛に関係のない人の生死を書き換えたという法律違反を責められたのだ。けして人を殺す設定を作ったことではない。そのことに、サチコはファイルを破り、窓から放り投げたい衝動に駆られた。ここで大事なものは人の倫理ではない。法律を守ること。ただそれだけなのだ。

ふと目に入ったファイルには、小さな付箋紙がびっしりと貼られている。開くと遠藤の字で、細かい誤字脱字から始まり、設定が陳腐で曖昧だ、もっと良い設定を検討するようにということまで、あらゆるものが指摘してある。サチコは肩を落とした。どうしてこんなところに配属になってしまったのだろう。自分に能力がないのか、あるいはこの仕事が自分に向いていないのか。

遠藤のいないこの部屋には、サチコの体内から発生した淀んだ空気が充満している。濁ったものを再びサチコが吸い込み、体内で同化する。背後から錆びついた鎖がずりずりと肩に絡みついてきて、徐々にサチコの体を縛っていく。鎖が体中に食い込み、サチコはしばらくその場から身動きが取れないでいた。

突然部屋に入って来た青白い顔のサチコに、遠藤はぎょっとした。いつもは自分が訪ねない限り、ほとんどの時間顔を合わせない。婚姻課の職員など誰も残っていない深夜に、サチコはゆらゆらと遠藤に近づいてきた。

「遠藤さん、やってしまいました……」

マスカラが落ちたのかと思うほど、黒く染みついたくまが目につく。ほとんど開いていない瞼からじっと見つめられると、部屋の暗がりの部分からこの世のものとは思えないものが這い出して来そうな気持ちになる。

「どうしたの」

そうした遠藤の心とは裏腹に、口から出た音は低調で、室内にシンプルに響いた。

遠藤は、怖がりで小心者だ。すぐ緊張してトイレへ駆け込む。しかし、そうした体の不調を皆に気付かせないほど、淡々とした話し方と振る舞いで、元来友人からは冷静で人間味のない奴と半ば嫌みを含んで言われてきたのだった。

「この文言なんですけど……」

サチコが開いたページには、荒木俊彦という人物の恋愛設定が記載されていた。サチコはその上に何も言わずに紙を置いた。それは荒木俊彦の死亡届であった。

「荒木俊彦は既に亡くなっていたんです。付箋が付いていなかったから、気付かないまま最後まで処理を終わらせてしまって……。亡くなった人との恋愛関係を設定してしまったんです」

サチコが処理した案件は、遠藤を通してから、課長が決裁する。しかし、実際のところ、遠藤がほとんど全ての誤りを見つけ、サチコへ戻してやるのが常であったため、課長は中身をじっくり見ることはなかったのだ。

「俺がチェックした後に亡くなってしまったのか」

「しかも、重豊由美子と亡くなった荒木俊彦は全く接点がなく、この設定で出会うんです。出会いがなければ別れも生まれません。重豊由美子はどうなるんでしょうか……」

ミスに気付けば修正できたが、サチコは気付かないまま決裁の終わった案件を処理に掛けてしまったのである。重豊由美子が荒木俊彦と出会わない限り、次の設定を付けることができない。つまり、亡くなった荒木俊彦と顔を合わせない限り、一生恋愛ができないということになる。遠藤はふうとため息をついて頭を抱えた。

「さて、どうするかな」

頭を抱えてみたものの、内心パニック状態であった。必死で頭を回転させ、これまで似た事例がなかったか頭の中の引き出しを開けて探すのだが、途中で心臓の鼓動が邪魔をして、引き出しを荒らしてしまう。腹が痛くなり始め、きゅるきゅると下腹部を絞り上げてくる。遠藤はおもむろにファイルを取り、サチコに見せた。

「ほとんど今までしたことないけど、この条文を使って、立入検査をしてみようか」

遠藤はサチコの肩に手をかけた。

「何とかなるよ。俺に任せて」

「……はい」

今にも霊界へと連れて行きそうなサチコの顔を見ながら、遠藤は肩に置いた手が震えないように力を入れていた。

重豊と書かれた表札の前で、遠藤は悩んでいた。一番の問題は、どのように立入検査を行うかということであった。一般に知られていない法律であるため、本当の理由を知らせる訳にはいかない。しかし、設定された現実のせいで重豊由美子と亡くなった荒木俊彦の関係性がどのように変わったのか分からなければ対策の取りようがない。ここ何日かターゲットを尾行し、観察してきたが、有力な情報は得られない。友人と思われる者何人かとも接触したが、亡くなった荒木との接点が全くなく、二人の関係については情報が得られなかった。

「こうなったら直接本人に聞くしかない」

遠藤はインターフォンを押した。

通された居間で、開口一番、

「最近、公務員の人気も落ちてきておりまして、K区役所の新たな取り組みとして、学生さんのニーズを把握して優秀な人材確保ができるプロモーションを行うということになりました。厳選な抽選の結果、由美子さんにお話をお伺いしようということになりました」

と、遠藤は捲し立てた。母親はにこやかに遠藤を由美子の部屋に通した。遠藤は垂れてくる汗をハンカチで拭きながら、椅子に座った由美子を見つめる。

「あらゆる話を聞かせてもらって、何か学生さんに響くようなプロモーションができないかと思ってるんだ。何でもいいから、最近感じてることを話してもらえないかな」

由美子はぽつぽつと話し始めた。黒いストレートの髪をした由美子は、おとなしく真面目な印象で、慎重に言葉を選びながら俯き加減で話していた。遠藤とはあまり目を合わせようとしない。大学の話や仕事への考え方などを一通り話した後、

「最近の学生はこんな感じだと思います」

と締めくくった。遠藤は真剣にメモを取っているふりをしていたが、心の中では恋愛の話をいつ切り出そうかと焦っていた。話が途切れたのですかざず、

「ところで……由美子さんは好きな人とかいるの？」

由美子は質問に少し戸惑ったように目を泳がせたが、すぐに大学の話をしていた時と同じような調子で、

「いいえ。いません」

とだけ呟いた。まだ突っ込めるか、ここで引くべきかと遠藤が迷っていると、由美子が沈黙を遮るように言葉を繋いだ。

「何かこう……不思議な気分なんです。会おうべき人がこの世にもういないような気がして。私、もう恋愛できないんじゃないかって思ってるんです」

その発言に、遠藤は思わず、由美子の母が持ってきたお茶をひっくり返しそうになり、握っていたハンカチでテーブルの雫を押さえた。

(付与した設定によって、人の心に少しずつ影響が見られる。由美子さんはもう本当に恋愛ができないかもしれない。)

夕暮れ時になり、玄関まで見送りに来た由美子は、笑顔で

「私によければ、またいろいろお話しますから。頑張ってください」

と言い、小さく手を振った。

肩を落として、遠藤は歩き始めた。アスファルトに落ちる影が細長く伸びる。ゆらゆらと揺れる影が

、どうしようどうしようと嘆いているようだった。

しばらくして遠くから由美子が叫ぶ声が聞こえた。

「遠藤さん、待って」

振り返ると、由美子がつっかけを履き走って来る。遠藤がテーブルに置き忘れてしまったハンカチを握りしめていた。

あと数歩というところで、由美子は突然つまずいた。慌てて遠藤が体を受け止めた拍子に、鞆が手から離れ、中に入っていた荒木俊彦の資料が滑り出た。

「あっ……」

アスファルトの上にばらばらと散らばった資料を、遠藤の腕の中で由美子は見つめた。資料に貼付されていた荒木俊彦の写真を見た由美子は、遠藤からさっと体を離すと、みるみるうちに顔を赤らめていく。遠藤はとっさに資料を横目を見た。

「荒木俊彦と重豊由美子は、道で倒れかけた由美子を俊彦が助けることで出会う」

由美子は資料を拾い上げ、遠藤に手渡ししながら言った。

「この方、どなたですか？」

道でつまずいた由美子を体で助けたのは遠藤であったが、結局は荒木俊彦の案件があったから遠藤は由美子と知り合うことになり、それによって由美子は道端で膝を擦り剥くこともなかった。つまり、荒木は間接的に由美子を助けたということになった。結局、サチコが曖昧な設定をしていたおかげで、重豊由美子は荒木俊彦と出会うことができたのだった。

しかし、役所に戻ってから、遠藤とサチコは部長室に呼び出され、こんこんと説教を受けた。部長室を出て、廊下を歩いていると、サチコが大きな溜息をついた。

「私、遠藤さんがいてくれて、本当に良かったと思います。今回の件だけじゃなくて、私が波風立わずに仕事をしていられるのは遠藤さんのおかげなんだって思ったから」

遠藤が立入検査をしている間、サチコは膨大な電子チップの波で溺れながら、遠藤のことを考えていた。遠藤が言うてくる細かいことはサチコを荒波から守るためなのだ。そのまま何もされず放り出されたら、サチコは自分の力だけで広大な海を泳ぎ切るしかない。婚姻課の職員が全員帰っても、遠藤は深夜まで残ってサチコの処理した案件を再度隅々までチェックしてくれていたのだ。

「まあ、今後は気を付けたらいいよ」

言葉はまた淡々とした調子で飛び出したが、遠藤はサチコにストレートに褒められたことで心臓が熱くなり、息が苦しくなっていた。

「遠藤さん、顔が赤い。体調悪いんですか」

心配して下から覗きこもうとするサチコの顔を遠藤はまともに見られなかった。

「部長に怒られたからね。疲れただけ」

そう言って、慌てて部屋へと戻って行く。サチコは首をかしげ、遠藤の後をゆっくり追いかけた。

サチコは、はっとした。いつものように画面に向かってデータを書き換えていると、知っている名前が表示されていたからだ。

「遠藤涼太」

先輩の遠藤であった。

「遠藤さん、彼女いたんだ……」

サチコは少し残念な気持ちになったが、遠藤の彼女である鷺汐悠里は遠藤と恋愛中にも関わらず、画面上では次の恋愛相手が弾き出されている。つまり、サチコは遠藤と鷺汐を別れさせなければならない。

この事実を遠藤に伝えるべきか迷った。しかし、通常この業務はサチコ一人で行わなければならない。これまでは前任者ということで隣の婚姻係に異動した遠藤がチェックに入っていたが、本来はサチコ一人で行い、決裁権を持つ課長が確認するというシステムなのだ。最近は少しずつ遠藤のチェックもなくなり、最終的にサチコが一人で業務を行うことができるように体制が整いつつある。

腕組みをし、椅子を回転させた。

「遠藤さんと彼女をどうやって別れさせればいいのか」

そう声を出して言ってみたが、実際にはそれで収まるような気持ちだけでないことは薄々感じていた。サチコがどんなミスをして、矢面に立ち守ってくれる遠藤が気になり始めていたのだ。

鷺汐が次の相手と出会うまであと一週間。サチコは思い切って、書いてみた。

「遠藤が他の人を好きになってしまったことで、鷺汐は別れを決意する」

しかし、その後が書けなかった。サチコは自分の電子チップを差し込んでみた。恋愛期間は来ない。

「遠藤涼太は土居幸子を好きになる」

その一言がどうしても書けなかった。

遠藤がどんよりした顔で部屋に入って来た。

「最近、俺の電子チップ触った？」

「遠藤さん、それは第三十五条違反ですから」

サチコはいつもの仕返しのようにわざと遠藤の声色を真似て言った。遠藤もそれにつられて少し笑顔になった。

それからというもの、サチコは遠藤の様子を観察していた。遠藤はもう元気を取り戻し、婚姻係の職員と楽しそうに話していた。遠くからその笑顔を見つめながら、自分が遠藤の相手を決めなければいけないという思いに苛まされていた。しかし、他の相手を書くことも、自分の名前を書くことも、どちらもできない。遠藤のことを考えると、心臓が打ち鳴り始め、何も手につかなくなってしまう。遠藤に幸せになってほしい。しかし、自分以外の誰かが隣にいる設定などできない。毎日、遠藤のことを考えていた。

しかし、ある時、サチコは気付いた。

――これは恋なのではないか。

思えば、こんな仕事をしてきてずっと忘れていたが、これが学生時代感じていた恋だったのではないかと。しかし、おかしい。人類は恋愛ができない生物だったのではないだろうか。自分の気持ちは一体何なのだろう。

サチコは門外不出の極秘文書を集めた倉庫で、過去の事例ファイルを遡ったり研究論文を読み漁ったりしてみたが、そこにはやはり人間が恋愛できるとは書かれていなかった。

悶々としてコンピュータの前に座っていると、遠藤が部屋に入って来た。サチコは、傷めつけてくる胸を押さえながら、思わず立ち上がった。

「遠藤さん、人類は恋愛ができない生物なんですよ？」

「そうだよ」

遠藤は何を今さらと言わんばかりに、いつものように顔色変えず答えてくる。

「私、おかしいんです」

「何が？」

「遠藤さんと彼女を別れさせる設定を書いたのは私です」

「分かってるよ」

遠藤は苦笑いしながら、髪の毛をかきあげた。

「だって、君が書き換えなければ、俺と彼女の関係が変化することはないんだから」

「でも、私、遠藤さんの設定は書いていません」

「え？」

「遠藤さんの恋愛の設定はずっと書けないでいました。それで悩んで、毎日毎日遠藤さんのことを考えていたんです。ずっと考え続けていたら、……遠藤さんのこと好きになってしまったみたいなんです」

サチコのはっきりした言葉に、遠藤の顔は一気に真っ赤になる。窓一つなく、書類に埋もれた空気の悪い部屋の中で、サチコはくらくらして倒れそうな気持ちで言った。

「遠藤さんの電子チップに、土居幸子との恋愛の設定を付与してもよろしいでしょうか」

遠藤は赤くなっていたが、ああと大きな溜息をついて俯くと、ハンカチで顔をぬぐった。そして、気を取り直したように、冷静な声でサチコに言った。

「何度も言ってるだろう。人類は自分では恋愛できない生き物になってしまったんだよ。つまり、君が付与しなくてもいい」

「どういうことですか」

「俺は土居さんのことが好きだ。これは別の誰かが付与した設定でなければならない」

遠藤は淡々としたいつもの調子で愛の告白をしてきて、それはサチコにとって驚くべきことだったはずだが、気持ちとは裏腹に冷静だった。思いが叶ってうれしいというよりはむしろ、誰が設定を操ったのかということの方が気になった。

「でも、電子チップは私しか触れません。私しか認証キーを持っていません」

「設定の付与なしに、恋愛なんてできない」

「……もしかして、実はその前提が誤りなのではないですか？」

えっ、と遠藤はサチコの顔を見つめて停止する。サチコはぐっと遠藤に近づく。

「もしかしたら、私、自分で恋愛できる新しい生物なのかもしれない」

サチコは思った。人間の運命を変えるのは、やはり人間のはずだ。研究論文が何だ。法律が何だ。自分が感じていることが一番確かで、感覚を超えるものなんてこの世にあるわけがない。

遠藤は顎に手を置いて首を傾げながら、ふっと笑った。

「じゃあ、俺と君の恋愛は法律を超えたってことだ」

「そうです」

サチコがあまりに真剣に言うので、遠藤はもう否定しなかった。しかし、遠藤は分かっていた

のだ。自分の恋愛は自分で書き換えてはいけない。これは内部の運用で決まっているのだ。文字化されていない、慣習なのであった。つまり、この運用方針を知っているものだけが設定を付与できるのであり、遠藤とサチコを除けば、課長しかいない。遠藤は言った。

「来年は、他の課に異動ってことかな」

「えっ、どういう意味ですか？」

同じ課に恋愛関係の二人を置かないのは人事の鉄則なのだった。遠藤は不審そうに見つめているサチコの頭をぼんぼんと撫でた。

今はサチコに恋愛の幻想を見せてあげよう。あまりにも権力的な組織の中は、規範や慣習でがんじがらめなのだ。少しでも希望の光がないと、その網の目をかいくぐりながら仕事なんて続けていけない。組織内部の慣習なんて、いつか少しずつ教えていけばいいや、と遠藤は思った。

(終)

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまさぐっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人
にとって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平 「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりで考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



一路真実

実は「K区役所愛情創出室」は、『創星』創刊号の作品として構想していたものです。「恋愛社会を裏で操る新人の小説」から「仕事がイヤだ小説」へ秘かに呼び名を変え、『創星』が4号まで出たことに対して、時の流れをすごく感じます。

鳩山豆子



穂村弘さんの短歌の本『短歌ください』（ダ・ヴィンチブックス）に自分の短歌が載っていました。うれしかったです。



詠人不知

シロウトスレパスルホドクロウトワツキモノ

ナナセ
ヒユキ



オレンジ色の太陽とかまんまるの月とか流れる雲とか、あるいは、蟻の行列とかつぶれた空き缶とかちっぽけな石ころとか、そんなものの中に僕らは確かに存在してるんだね、ってことを最近よく考えています。



天沼太郎

初めまして天沼です。クラシック音楽にまつわる雑文など書いていきます。元々思いこみの強い人間ですので、内容は半分ほど差し引いてお読みいただければ幸いです。
mailto:doguramagura71@gmail.com

To's job



今回も表紙を担当しました。
平成24年6月25日（火）から7月1日（日）まで
福岡市美術館市民ギャラリーB室で展覧会をします。



マチコ・マン
・ネンドコ

熱燗が旨い季節になりましたね。最近ハマっている酒の肴は・・・
①冷奴に辛子醤油・・・ただかけるだけです。最初はツンとしますが次第にはまります。
②長葱をみじん切りにしてごま油&塩であえる・・・そのままでも何かにかけてもgood!

星屑書房について &メンバー募集！！

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。

現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。
本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。

映画を観ることが好き。映画を撮りたい。・・・などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。

社会人が中心ですが、誰でも入会OK！「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆

少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！ stardustbooks@live.jp

お待ちしております！

☆星屑書房ホームページ：<http://stardustbooks.soragoto.net/>

フリーペーパー『創星』4号

2011年10月30日 初版

<http://p.booklog.jp/book/58899>

表紙デザイン : To's job

表紙短歌 : 鳩山豆子

著者 : 星屑書房

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/stardustbooks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58899>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58899>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ

僕は上手く飛べるだろうか
なにげなく星の名前を忘れた夜明け

